

育てる漁業

平成17年5月1日

NO.384

発行所 / 北海道栽培漁業振興公社

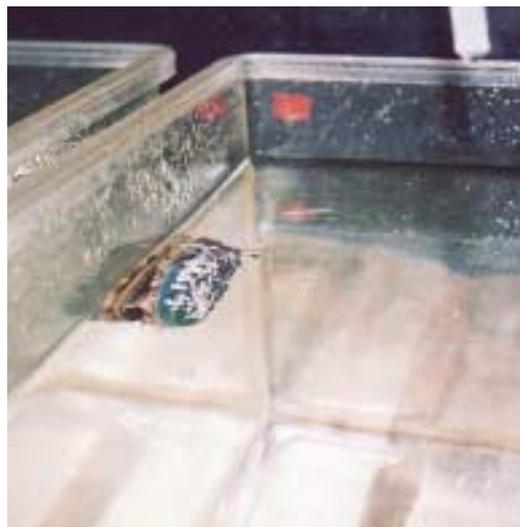
発行人 / 杉森 隆

〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目

(北海道第二水産ビル4階)

TEL(011)271-7731 / FAX(011)271-1606

ホームページ <http://www.saibai.or.jp>



熊石事業所 アワビの採卵

本社の熊石事業所で4月6日、今年度3回目のアワビの採卵を行いました。

午前11時、成熟したオス10個・メス17個の親貝を採卵槽に移し、午後1時に部屋を暗くして産卵を待ちます。午後2時過ぎにはオスが放精を始め、40分ほど遅れてメスが卵を放出しました。卵を受精させた後、15分ごとに4回洗卵し、その間に受精卵の計数を行います。得られた受精卵は約520万粒でした。翌朝7時、浮上した幼生を分離して幼生飼育槽に収容しました。幼生は11日、採苗槽に移し、波板に付着させました。付着数は約140万個でした。

CONTENTS 目次

漁業士発アクアカルチャーロード 2

新星マリン漁協青年漁業士 祐川博樹さん

栽培公社紙上大学 今月の講座 3 ~ 7

ヒラメの市場調査に出かけよう!

アクア母ちゃん 北るもい漁協羽幌女性部長 ... 8

浜のお買い物 石狩湾漁協 厚田朝市 8

漁民に貢献できる 青年部活動目指し

新星マリン漁協の祐川博樹さんは今年1月、青年漁業士の認定を受けたのを機に、旧留萌漁協時代から務めてきた青年部長を引退しました。

祐川さんが部長在任中に行った青年部活動の中で、新たな取り組みに『留萌産直市』があります。

青年部主催の産直市

「青年部主催で去年、留萌地方卸売市場で産直市を開いた。5月から8月までの各第4日曜日で、8月だけ小平産業まつりの会場で行った。9月は加工協青年部や青年農業者グループ、観光協会なども参加して盛大に開催して締めくくる予定だったのが、台風で中止を余儀なくされた。で、代わりに12月恒例の水産まつり『うまいよ！るもい市』に出店した」

ただ新鮮な水産物を売るだけでなく、ヒラメのつかみ取りやイカ釣り、ホタテ釣り、殻付きウニの詰め放題や買った魚介類をその場で焼いて食べられる焼き台コーナーを設置するなどイベント色の濃いものになりました。

「殻付きウニの詰め放題で大損してしまい、全5回の開催で通算10万円の赤字になってしまった。でも、留萌の物は留萌に来て買ってほしい、留萌に人を呼ぼうというのが発端だったし、ヒラメのつかみ取りや

イカ釣りです子供たちがキャッキヤとすごく喜んでくれて、それ見てるだけでもやってよかったと思ってる」

青年部のこの産直市の活動は、周囲の高い評価を受け、今年から町を挙げてのイベントにということで各団体も参加して実行委員会が立ち上がり、祐川さんはその実行委員長となりました。

アブラコの人工ふ化

新星マリン漁協の青年部は栽培漁業に関しても熱心に活動しています。

「クロガシラガレイの人工ふ化自然放流やハタハタの人工ふ化種苗放流は随分前からやってるが、一昨年からオレが言い出しっぺになって新たな試みとして、アブラコの人工ふ化放流に取り組んでいる」

一昨年の秋、人工採卵して受精させましたが、初の取り組みは残念ながら失敗に終わりました。

「磯では海藻に固まって産み付けられてるのを見かけるが、実際に人工授精させてもハタハタのプリコのように固まるでもなく、クロガシラのようにシュロブラシやふ化盆にくつつくでもない。どうしたらいいのかお手上げ状態だった」

昨年は卵を持った親魚が確保できずに断念、今年こそは成功させたいと意気込みます。



新星マリン漁協青年漁業士
祐川 博樹さん

「勉強しようにもアブラコの種苗生産の成功の実例がほとんどない。まあ、未知の領域だからこそやりがいもあるし、面白い。アブラコは沿岸刺し網漁民の貴重な資源だ。成功するまで続けたい。まずは、親魚確保が先だけど」

祐川さんは青年漁業士になったばかりで、実際何をしたらいいかわからないと話します。

「先輩たちに聞いてもみんな悩んでるっていうし、とりあえずは青年部の顧問ってことで、部長をもり立てて、漁民や地域に貢献してるといえるような青年部を目指して今後も活動していきたい」

子供たちとの関わりを

これからは、子供たちとの関わりも増やしていきたいと祐川さん。

「今、飼育しているハタハタの稚魚を2~3センチにして、地域の小さな小学校の生徒を集めて、課外授業として放流してもらおうと計画している。産直市で魚に触れて喜び子供たちの顔を見てたら、もっともっと魚を身近に感じてもらいたくなった。その機会をオレたちで作るのも地域貢献のひとつかなって思うよ」

北海道立中央水産試験場 栽培技術科長

石野 健吾

今月の講座

ヒラメの市場調査に出かけよう！

市場調査は語る

いま稚内市から函館市までの日本海と津軽海峡沿岸では、(社)北海道栽培漁業振興公社が生産した稚ヒラメ(全長8~9cm、写真1)が放流されています。その数は毎年220万尾余りで、H8(1996)年からH16(2004)年までの総放流尾数は約2,000万尾に達しています。ヒラメは道内で放流される種苗の中でも、ホタテ、サケ、ウニに次いで4番目に多い栽培対象種となっています。

サケの放流やホタテの地蒔き放流では、3年後、または4年後の収穫時に、水揚げ量の数字がほとんどそのまま放流群の回帰数や回収重量として使うことができます。そこで何年放流群は生き残りが良かったとか、何年級はいつもより回帰率が悪かった...という具合に放流効果の大きさを評価できます。

ところがヒラメは漁獲量を見ただけでは放流効果の大きさは分かりません。なぜでしょうか？それは放流した種苗ヒラメは天然ヒラメに混ざって獲れるからです。サケやホタテのように、水揚げされた個体のほとんどすべてが放流モノであれば、漁獲量の多寡がストレートに放流効果を表します。ヒラメでは放流ヒラメ

の混じり具合(混獲率あるいは混入率)を毎月2回チェックする市場調査で、初めて放流効果に分かるのです。市場調査のデータを1年間蓄積することで、人工種苗ヒラメの年間の収穫尾数を推定できるようになります。確かに“手間暇がかかる”市場調査ですが、ヒラメの放流効果は市場調査無くして知ることはできないと言う点で、同じ放流というスタイルを取るサケやホタテとは違った難しさをヒラメは持っています。

協議会で語る

それではヒラメを水揚げしている産地市場は、全道に何カ所あると思いますか？正解は36カ所(宗谷、... 榎法華)。このうち約6割にあたる21カ所で現在、ヒラメの市場調査が行われています。

ヒラメの市場調査は宗谷・留萌・石狩湾・後志南部・桧山・津軽海峡の6協議会(漁協と市町村で構成)が、道の水産技術普及指導所や公社の事業所(羽幌・瀬棚)の協力を得て、各協議会の複数市場で実施しています。市場当たりの平均調査日数は、毎月2回フル出動で頑張っている協議会もあれば、平均すれば2~3カ月に1回程度の協議会までいろいろあります。実はこの調査市場数や日数の多い少ないが回収率の推定



写真1 人工種苗ヒラメ
精度に影響してきます。

ヒラメ放流事業がH8年にスタートしてから10周年を迎える今年、ヒラメ協議会で市場調査を主体的に取り組む体制をさらにどう発展させるか、この節目の年に関係者が集まって、率直に協議会で語り合うことが重要ではないか、と痛感していますが、如何でしょうか？

今月のこの講座では、そのような語り合いの場が開かれるきっかけとなることを期待して、これまでの市場調査で分かったことのいくつかをお話します。

水揚げサイズは語る

さっそく図1を見て下さい。これはH15(2003)年の市場調査で見つかった放流ヒラメの体重組成です。各協議会(宗谷・留萌・石狩湾・後志南部・桧山・津軽海峡)でヒラメの市場調査の日は無作為(ランダム)に選ばれていますから、放流魚全体の水揚げ傾向をこの棒グラフは良く代表しているものと考えら

れます。

では、ここで本講座に出席の皆さんに質問です。水揚げ時のヒラメの体重組成で一番大きな割合を占めているのはどれでしょうか？（「体重0.5kg以上1kg未満」の声）。そうです、正解です。実は6地域すべて、この500g以上～1kg未満で水揚げされた放流ヒラメが、全水揚げ尾数の4～6割を占めています。これに500g未満の水揚げ魚の割合（図1の一番左側の棒）を加えてみます。実に6～9割の放流魚が体重1kg未満で収穫されていることが、この間の市場調査から分かってきました（地域によっては、規制サイズである全長35cm未満の放流ヒラメを賄いに回すという話しも聞きますので、実際には一番左の棒の高さはもう少し高くなるかも知れません）。

つまり経費をかけて作り、海に運んで放流した人工種苗ヒラメが放流後に、体重が1kgを越えて収穫される割合は、調査データから判断すれば、水揚げされたヒラメの全数の僅か1割～4割に過ぎないことが分かってきました。（すかさず出席者から、「前浜にいる間に獲っておかないと、よその浜へ行ってしまいうべや！」の声）

なるほど、なかなか的を得たご発言です。でもちょっと待って下さい。ホントにそうでしょうか？ホントに放流ヒラメは、放した前浜でキロサイズになって恩返しをしてくれる前に、よその浜へ逃げて行ってしまいますのでしょうか？もしそうなら、おちおち1kgを越えるまで待ってなんかいられないはず…。浜の経験と勘から判断して、果たして放流後の移動はそんなに大きいものと受け止められているのでしょうか？放流した栽培資源の収穫管理を考える場合、やはりこの放流後の移動の問題については避けて通れない調査課題ですから、これまでに得られた知見を整理しておきたいと思います。

標識放流は語る

これまでに全道の4海域（津軽海峡、桧山、石狩湾、宗谷）の浜で標識を付けて放流後の移動調査が行われてきました。標識ヒラメが、その後どこで再捕されたか、市場調査や漁業者の皆様から寄せられた報告から、移動の特徴について見てみましょう。

まず津軽海峡と桧山海域の場合は、瀬棚町、北桧山町、大成町、熊

石町、乙部町、江差町、上ノ国町、奥尻町、知内町、函館市の10地域で、それぞれ地名・放流年の入った標識（例えば、セタナ1994）を付けて放流してきました。放流後4年目までの再捕記録をまとめて図2に示しました。ご覧のようにどの前浜の放流群も放流点から半径30km以内で再捕ヒラメの7割以上の個体が報告されています。もう少し補足すれば、再捕個体数は放流点から半径10km以内の市場でいずれも最も多く報告されています。再捕後の年齢別に見た場合でも、同様の傾向が見られています。

また良く質問を受けるのは、津軽海峡の本道側の沿岸で放流したヒラメが海峡を渡って対岸の青森県の方へ移動するのではないかと、という点です。津軽海峡は水深が深く（約200m）、潮流も西から東へ3ノット程度の流れがあるため、青森側と本道側からの標識再捕記録はお互いの再捕がほとんど報告されていないという実態があります。したがって津軽海峡を挟んだ両群の交流は非常に限定されたものと考えられています。

石狩湾に面する余市の浜でもこれまでに数多くの標識放流試験が行われてきました。これらの放流群から再捕されたヒラメの7～8割が小樽・余市・古平・美国の4カ所の市場で水揚げされています。これらの市場は何れも放流点から半径30km以内にあります。

それではもっと北の宗谷海域の放流ヒラメではどうでしょうか？ヒラメは温帯域に分布の中心を持つ底魚で、冷たい親潮系水に洗われる北海道の太平洋岸やオホーツク沿岸には

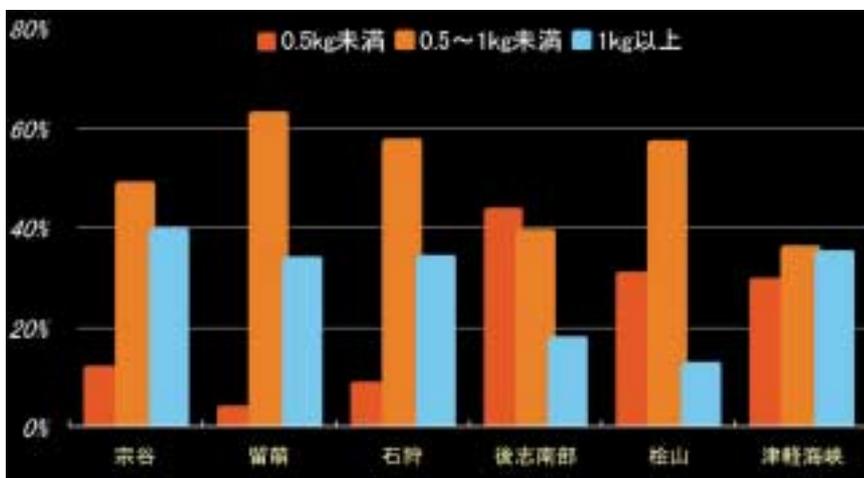


図1 収穫された放流ヒラメの体重組成

ほとんど分布していません。とすると、ヒラメの地理的分布の北限に近く、水温条件に恵まれているとは言えない宗谷水域で放流後の動きがどうなっているのか気になります。

1999年5月に稚内市では平均全長202mmの標識ヒラメを997尾放流しています。放流後約2年半の間に再捕された計71尾の標識ヒラメの約6割が放流点から30km圏内の漁場から報告されていました。放流魚の成長速度は成長期にあたる7～11月の5ヵ月間中に、1日当たり平均0.94mm/日で、全長50cmに達する個体も再捕されています。また成長スピードも本州の宮古湾等と比較しても遜色無いくらい速いことから見て、宗谷水域は決して放流ヒラメにとって生息に不利な水域とは言えません。むしろ宗谷の水温、餌環境にうまく適応して生き残っていると見るべきでしょう。

“放流後のヒラメはどこへ行く？”という先程の質問について、これまでに得られた知見から得た答えは、「北海道内の前浜に蒔いたヒラメは、放流後に生き残った尾数のおおよそ3分の2以上の個体が前浜に留まっているケースが多い。30kmを越えて動く割合はおおよそ1/3以下の個体に過ぎない。」ことを示しています。つまり前浜に残った2/3以上の個体を上手に大きくして収穫することができる、ということになります。前浜で放流したヒラメは地場産の栽培資源として資源管理の手のひらにのせることができる、あわてて収穫する必要は無い、と確信を持って大丈夫です。

実は本州でも県境を接している青森、秋田、新潟、富山の漁業者は、

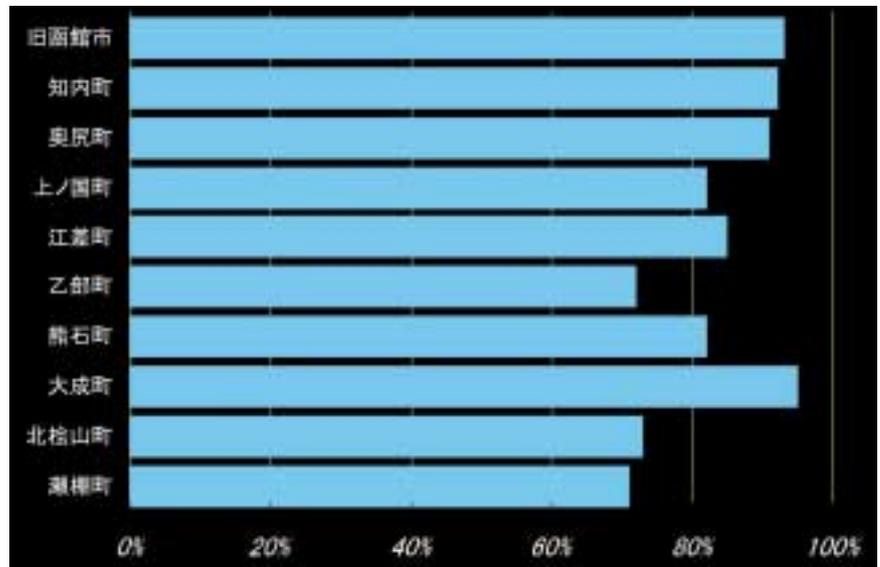


図2 放流後4年以内に放流点から30km圏内で再捕された標識ヒラメの割合

自分の県のヒラメの放流効果が悪いのは近隣の県に逃げて行くからではないか？という疑問を持っていました。そこで日本海区水産研究所が、各県の親魚ヒラメの遺伝子型を目印にして、各県で収穫した放流ヒラメの出身を調べたところ、およそ80%以上の個体が自県の遺伝子型を持っていました。つまり、自県での放流効果が良くない原因が他県による収穫（横獲り）によるものとは言えないということが分かってきました。遺伝標識という現代的な調査手法からも外部標識という古典的な調査手法による解析結果と同様の放流ヒラメの滞留性が明らかになったことは興味深いと思います。

市場単価は語る

そこで先程の市場調査から分かった「前浜に生息する放流ヒラメの多くが1kgに満たないサイズで収穫されている。」という現実を目を向けて、考えて頂きたいことがあります。それは、前浜から逃げて行かないのであれば、もっと大きくして収穫した方が儲かるのではないかと観点です。

現在、ヒラメの道内市場への最小出荷サイズは漁業者間で全長35cmと決まっています。ただし、ヒラメの雌の初成熟サイズが全長40cmを越えることや、放流効果を増大させる必要に迫られていることから判断して、出荷サイズ的大型化がまさに現実の問題となっていると思います。

そこで、現在の規制サイズを5cm上げた全長40cmの場合と、10cm上げた全長45cmの場合、1尾当たりの価格は現状と比べてどれくらいアップするのか、最近の産地市場の単価を基に計算してみます（表1）。

この間の市場調査で測定したデータから、収穫された放流ヒラメの平均体重は全長35cmで0.47kg、全長40cmで0.7kg、全長45cmで1kgとなることが分かっています。ヒラメの単価（円/kg）はご存知のように銘柄によって異なってきます。ここでは1つの例として、道南の主要生産地の1つである知内町における盛漁期（2003年10月）の値を使って計算してみます。

この時の単価は、銘柄小（0.4-0.6kg未満）が740円/kg、銘柄中（0.6-1kg未満）が1,700円/kg、銘

柄大（1 - 6 kg未満）が2,430円/kgで、先程の各全長時の体重と銘柄別単価を乗じると、1尾の価格は348円、1,189円、2,430円となります。価格の比は全長35cmを1とすると、40cmでは3.4、45cmでは7となります。つまり、全長40cmで収穫すれば3倍以上の、全長45cmで収穫すれば7倍の経済効果が期待できると言えます。別の言い方をすれば、全長と体重の関係や、銘柄による単価アップの関係を上手に利用することで、放流効果のアップを引き出すことができるチャンスがあります。実は、道が1995年に発行したヒラメ放流マニュアルには、“経済効果を上げる回収法 - 回収サイズは全長35cm以上で、将来は全長40cm以上を目指す”と書かれています。

成長曲線は語る

では全長35cmのヒラメが全長40cmや45cmになるまでに、どれくらい待つ必要があるのでしょうか？これは放流ヒラメの成長パターンを見れば分かります。現時点ではヒラメの放流事業の事前調査（H2～H6年）で行った、道央と道南の2水域の成長曲線が得られていますが、放流水域の違いにもかかわらず、両者の成長曲線はほとんど一致しています。放流ヒラメは1年間に7～8cmほど大きくなり、成長する季節は主に6～11月の半年間に限られています。

このような成長の季節変化も考慮に入れば、春先に全長35cm前後のヒラメは秋口には多くの個体が全長40cmを越えるサイズにまで大きくなることが十分期待できます。

回収率は語る

放流効果を測る1つの物差しとして、回収率の値がよく使われます。市場調査から推定された回収率は積丹半島以北の3協議会（宗谷・留萌・石狩湾）では2 - 5%位、また積丹半島以南の3協議会（後志南部・松山・津軽海峡）では3 - 9%位となっています。推定値に幅があるのは、放流年級の違いなどによるものです。回収率には地域差があるようですが、回収率の最も高い放流群でも、現状の放流技術の水準では9%がやっとであるということが分かってきました。

損益分岐は語る

ヒラメの放流事業は最終的には民間事業として経済的に自立していくことが求められています。放流にかかる経費と放流から得られる収益が釣り合う点のことを経済の用語で、損益分岐点と呼びます。これを回収率で表わしたものを損益分岐回収率と言い、簡単な計算式（1尾当たりの種苗生産費 / 1尾当たりの収穫時の価格）で算出できます。

北海道のヒラメ放流事業では市場

調査から、その値は11%（=約80円 / 約700円）程度と推定されています。つまり100尾放流して10尾程度を収穫できれば放流事業が経済的に釣り合うことが明らかになってきました。

一方で、放流を開始した1996年～1998年までの各年級群の回収率は、高く見積もっても9%程度で、損益分岐回収率にはまだまだ安定して到達しているとは言えないことも分かってきました。

今後、北海道でヒラメ栽培事業を成立させるためには、損益分岐点（11%程度）まで回収率を引き上げるか、あるいは損益分岐点の値そのものを小さくするような方策を導入して、事業の経済的成立を阻んでいるこのギャップを埋めることが今最大の課題となっています。

サケとホタテは語る

ではヒラメの放流事業が栽培漁業へと脱皮・発展するために、既に栽培漁業として長年の実績を持つホタテガイとサケから何か学ぶべきことはないでしょうか？

表2はホタテガイ、サケ、ヒラメの損益分岐回収率に関する値を比べたものです。これらの比較から面白いことが分かります。

それは、ヒラメの損益分岐回収率はホタテ栽培漁業の損益分岐回収率を既に下回っていること、ヒラメの回収率はサケの回帰率と同等の水準に既に到達していること、の二点です。

前者はヒラメの回収率を飛躍的に上げれば、ホタテ型の栽培漁業が成立できることを示しています。また後者は、ヒラメの損益分岐回収率を

表1 人工種苗ヒラメの収穫サイズによる価格の違い

全長 (mm)	体重 (g)	単価 (円/kg)	価格 (円)	価格指数
350	470	740	348	1.0
400	700	1,700	1,189	3.4
450	1,000	2,430	2,430	7.0
500	1,400	2,430	3,402	9.8

表2 ホタテガイ、サケ、ヒラメにおける回収率と損益分岐回収率の比較

	現状の回収率 (%)	損益分岐回収率 (%) (A/B)	種苗単価 (円/個) (A)	水揚げ価格 (円) (B)	栽培漁業化
ホタテガイ	50-93	13	3	23	成功
サケ	3-6	0.7	6	813	成功
ヒラメ	2-9	11	80	700	実証中

飛躍的に下げることができれば、サケ型の栽培漁業が成立することを意味しています。

ただ放流後の生残率が現状のままではヒラメの回収率を上げるには、漁獲努力量の増加が避けられず、天然ヒラメの乱獲に直結してしまいます。また規制全長以下の小型ヒラメの漁獲量を増やし、不合理漁獲を助長する恐れもあります。

そこでもう1つの可能性として、損益分岐回収率の値そのものを引き下げること、つまり経済的ハードルを低くする方策が無いかどうか、次に考えてみましょう。

2つの方策は語る

表1に示したように現状の全長35cmの水揚げ規制は、残念なことに、放流ヒラメの成長の潜在性を十分に引き出しているとは言えません。そこで将来、この全長規制を40cmに引き上げる合意が漁業者間でできれば、損益分岐回収率の値を現状の10%から8%程度まで引き下げることが可能です。

もう1つの方策として、放流サイズの小型化による種苗コストの削減も検討する余地があります。仮に、現在の全長8cm放流を、全長6cm放流に変更できれば生産コストの削減に直結し、これによって損益分岐回収率を現在の10%から8%程度にまで引き下げることが可能です。中央水試では(社)北海道栽培漁業振興

公社の協力を得て、全長8cmのヒラメと全長6cmのヒラメで放流後の生き残りに差が生じ無いかどうか、耳石に標識を付けて放流して確かめる試験を開始し、検討に着手しています。

将来的に、全長6cm放流と全長40cm水揚げ規制の両者を導入できれば、損益分岐回収率を5%前後まで引き下げることができ、ヒラメの放流事業が経済的に成立する可能性が開けるのではないかと考えています。

市場調査に出かけよう

現在、日本全国では3,000万尾を超えるヒラメ種苗が沿岸に放流されていますが、まだどの都道府県でも民間事業として成立していません。ただしサケの孵化放流が事業化にたどり着くまでに約100年かかった歴史を見れば、ヒラメの栽培漁業は僅か10年と歴史が浅く、事業化へ向けての発展、成長はむしろこれからではないかと感じています。

最近、種苗生産技術も向上して天然魚に近い体色の種苗ヒラメを作ることができるようになりつつあります。また市場調査も、この間の水産技術普及指導所の献身的な努力の成果が実を結んで、いくつかの協議会では独力で調査ができるようになってきました。水揚げされたヒラメに混じる放流ヒラメの混獲率も、最近では10%近くにまで高まり、放流効果

が受益者の目に見えやすくなってきました。そして現在、最大で9%位の回収率が推定される技術水準に到達しています。もう一押しの放流技術と資源管理のレベルアップができれば、民間事業として自立の可能性がその先には見えています。

水産試験場にはその裏付けとなる放流技術のバージョンアップ、つまりより少ない放流コストで、より大きい放流効果を得る放流技術の開発が求められています。また「ヒラメ放流の手引き」(1995年、道立水産試験場)は、経験的なやり方に陥り易い放流作業や市場調査について具体的な指針を示し、全道規模で作業の中身を標準化したという点で、重要な役割を果たしてきましたが、放流サイズ・放流時期・放流場所に関する指針は完成されたものではなく、改良の余地が大いに残されています。

一方で、受益者である漁業者・漁協団体の皆様に期待したいことは、水揚げ市場での放流効果の確認を是非、お願い致します。産地市場で放流ヒラメが何尾水揚げされたのか、このデータが放流効果の大きさを測る唯一の物差となります。道立の水産技術普及指導所の指導、支援を受けながら、受益者主体のモニタリング体制を作ることが、今後の栽培漁業発展の鍵になります。さあ、今度も市場調査に出かけよう!

アファ母ちゃん

北るもい漁協羽幌女性部長
木村日登美さん



明るく 楽しく 元気よく

羽幌の女性部員は現在46名。仲が良く、パワフルで、何事にも快く協力してくれる頼もしい仲間達です。

一番の大きなイベントは「味まつり」への出店です。以前からあったお揃いのエプロンに加え、今年は胸に“North Rumoi and...” 背中に“絆”とプリントしたおニューのTシャツを作りました。浜鍋とイカめしなどを出していますが、完売したときの喜びや達成感もさる事ながら、それまでの準備段階で更に交流を深め、一つの目標に向かって皆ががっちりとして

クラムを組み、取り組む事により一層、結束力が固まっていく、そういうプロセスを大事にしたい、同じ時間を共有し、皆で苦楽を分かち合う事が最も大切なんです。

女性部は一人一人皆のもの。もっと全ての部員の皆さんに関心を持ってもらいたい。そのために新しい企画をどんどん取り入れて行こうと思います。昨年より今年、今年より来年.....と、ちょっとずつでもステップアップする事が理想ですね。

こんながさつな私を皆がサポートしてくれます。役員の人達など

は、忙しい中でもしっかりと自分の責任を果たしてくれて本当に心強い限りです。感謝しています。

まだまだ力不足の部長ですが、歴代の部長達がしてきた事をベースに、常に話し合いの場を持ち、私は私なりのカラーを出し、より魅力的な女性部になるよう、精一杯努めて行きたい。

これからも“明るく、楽しく、元気よく”をモットーに、皆から頼りにされる、存在感のある、そして“華”のある部長を目指して.....。

浜のお買い物

石狩湾漁協厚田朝市
TEL 01337-8-2006
営業期間 4月1日～7月末の毎日
営業時間 午前7時～午後3時

国道231号線を札幌方面から津軽方面へ、厚田市街に入り、右のセブ・マートと交差する印に左折。買場当たりに厚田漁港

まだ肌寒い4月半ばの平日、9時半過ぎに到着。客足はちらほら岸壁の一角、L字形に連なるテントに20軒ほどが店をかまえ、威勢のいいお母さんたちかたんなの焼いてきた魚を売っている。

今日は寒いし、こんなお天でも土日はおまよー！お母さんでも人はいっぱいいたね。いいそのから売れたいからわ。

この時期はカレイが中心、どれもイカ安！

カワガレイに黒ガレイ、てっかいカジカも！

ひと袋、千円で、ホタテも、売って！

他とは種類が違う魚が、並ぶ店が一軒あった。

うちはカレイ焼と、ちかう焼を使って、さからとさき魚も、さかうんだよ。

タナゴ買わないかい、さつりかうまいよ！

この日はちぎりとシケさよう、派に出なかつた漁家も、干したカレイや、ハタハタ、煮ダマ、煮ニミン、焼サケ、トバねど、加工品も売っている。

めずらしい物発見！可憐ハタハタ、厚田では昔からハタハタを漬けて、して保存して、塩を塩出して、塩いも、塩いよ、三千円もつまいよ。

自腹のお買い物は、練りタタキ(500円)と、ギンナンソー、ニチャリ入て、500円！

ギンナンソーは、酒粕を入り、みそ汁にして、ハタハタは、焼いて、いただきます、美味い。